

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン＝ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

【司会】 それでは二人目の発題者ジャン＝ピエール・ベルトン (Jean-Pierre Berthon) 教授にお願いします。ベルトン教授は、実は私の古い友人でございまして、昔、宗教社会学研究会というのがありました。1975年にできまして90年まで続いた会です。とても面白い会で、いろんな大学の人が集まっているんな学問の人が集まって夜を徹して議論した、とても懐かしい思いがありますが、そのときにベルトンさんもメンバーだったことがあり、何度か一緒に議論した機会があります。今はフランスにおける日本研究の非常に重要な一人として活躍されています。今日は明治の神道系の新宗教を中心にお話をしていただけるかと思います。それではよろしくお願いします。

発題

ジャン＝ピエール・ベルトン

「神道はどう翻訳されているか」というミニシンポジウムの課題は、特に神道系の新宗教にとっては、一体どのような意味を持つのでしょうか。フランスにおける狭い神道研究の分野では残念ながら、現代の神道系の教団がどう翻訳されているかというよりは、どのように翻訳するべきなのかのほうが、フランスにおける神道研究の現状に最も近い問題であると思います。色々考えましたが、今日の発表では丸山教を中心として、「幕末維新期における千年王国、言葉、エクリチュール」という幅広いタイトルをつけました。外から見た、ある新宗教をどんな面から解釈できるかについて考えたことを2.3点述べたいと思います。

新宗教に関する多くの研究の中では、言葉 (パロール Parole) の持つ大切さについての問題を取り上げた研究が少ないようです。教祖の口から出た言葉、指示的、予言的な言葉は、その教祖の体験やその一連の運動の出来事によって言葉の保持者に権威と正当性を与えます。いろいろな形で、いろいろな方法でこういう言葉は新宗教の運動の発展の推進力だと思います。教祖に受け取られ、そしてテキストとなった言葉を丸山教を例にしてどう取り、どう翻訳できるかについてお話しさせていただきます。

丸山教というのは1829年に現在の川崎市多摩区にある貧乏な農民の家で生まれた教祖の伊藤六郎兵衛によって成立されたものです。丸山教は江戸時代の富士信仰の新しい展開であり、1814年に成立した黒住教、1838年に成立した天理教、1855年に成立した金光教とともに、幕末維新期の代表的な世直しの性格の強い民衆宗教です。

数年前、日仏共同研究の関係で、世直し運動としての新宗教という短い論文を書いたことがあります。そのとき、世直しの宗教運動の変革活動における多様性をいかに処理するかというために、いくつかの機能を考えました。変革機能、保持・保護機能、そして夢

想機能（あるいはユートピア）というふうに分けたわけです。保護機能は、日本が外国に脅かされているという考え方をする教団に見られます。また別の形で、教団内にミクロ社会が形成され、そこでは信者が神社や宗教的な制約にそって生活を営み、社会変革よりは倫理志向に基礎を置く、宗教的な個人の変容が強調されることがあります。例えば、数年前青森県の近くにある松緑神道大和山という神道系の集団をちょっと調査したことがあります。そのときはこのパターンの宗教だと思いました。

保護機能の1つの例として、丸山教が「日本は開国によってアイデンティティを失った」ということを唱えたという話題を扱います。例えば外国からやってきた悪が、神国日本の文化的特異性を無に帰して国家の統一性にひびを入れる危険があると、伊藤六郎兵衛は強く感じたようです。彼は西洋社会の弊害、その服装、商法、横文字、西洋暦、医薬品、学制をたびたび批判します。外国の生活様式の影響を拒否するために、丸山教の教祖は明治の文明開化の齟齬に対抗して、有名な「天明海天（てんみょうかいてん）」というスローガンを掲げました、後でそのスローガンについて詳しく述べます。神道研究の専門ではない私ではありますが、今日の発表で触れたいことが2つあります。1つは世直し的なことと、その神道系の教団の背景、もう1つはやはり新興宗教が使う特殊な表現です。表現というよりは用語と言いましょか、観念とも言えると思います。

想像できることですが、六郎兵衛が自分の手で残したテキスト、または、彼の言葉を基にして信者が書いたテキスト、跡継ぎが書いた教祖伝を翻訳しようと思えば、まず頭が痛くなるぐらい多くの特殊な語呂合わせ、もじり、当て字などに必ずぶつかります。この2つのポイントを一緒に考え合わせると、現代の神道における普遍性と特殊性が、もしかしたら見えてくるかもしれません。

第一は丸山教の世直し思想とその背景です。明治維新时期には、政治と社会のいろんな所に新たな民衆宗教が登場しました。丸山教もその他の民衆宗教と同様に、日本の社会不安の中で、一こう言えるかどうかかわからないけども一救済思想の教義をもった宗教です。伊藤六郎兵衛は生家の丸山講を復興しようとして、富士講を基礎にして、厳しい独自の修行や呪術に打ち込んだ。そして民衆を救い、天下泰平という平和の世の中を実現しようとし、布教活動し始めました。しかしその頃、教導職の資格を持たないままの布教行為は警察に弾圧され、伊藤六郎兵衛は逮捕されました。ただ、生き神行者として崇拜されて、明治初年には富士講の1つの運動を起こした浅間神社の宮司の穴野半が、伊藤六郎兵衛のことを聞きつけて浅間神社で会見したという記録があります。1875（明治8）年、丸山教は富士一山講社に参加して布教活動を公認されました。1882年、富士山講社は教派神道の扶桑教として独立して、1885年に丸山教は扶桑教から分離して神道丸山教会本院と称しました。教勢は1887年まで東海、関東の地域に広がりましたが、六郎兵衛が死去した1894年以後、教勢を失いました。

幕末明治維新时期における民衆への布教は、神道家に対する幕府の禁圧にもかかわらず、神道説の民衆化というプロセスがある程度成功したことを示すのではと思います。千年王国運動は世界のいろんなところで、社会の厳しい近代化過程においてよく見られました。

丸山教は耐え難いとみなされた当時の社会のかわりに、より公正で完璧な社会を民衆に提供することを試みました。その理想的な社会を実現するために、六郎兵衛は過去への回帰を唱えます。具体的には、失われたバランスを回復することを恩恵とした山岳信仰の儀礼を基礎にして、忘れられていた神の道に再びもどり、神の生命を受けて富士山の斜面で苦行します。断食行、煙行、水行を繰り返して行いました。地上天国を具体化したことは、単なる農民の農業生産の成果がもたらす平和、丸山教のいう天下泰平と五穀成熟の理想世界を示すことです。世直し宗教としての丸山教は明治社会の混乱の中で民衆の生活が危険な状態になったと思われるとき、この社会を厳しく批判します。終末的メッセージが表現されています。例えばまもなく丸山講の信徒のみが生存して清涼とした世の中になる、といった意味の教義があったりします。

反近代主義はまた、反西洋主義でもあります。神聖な神によって救われて、平等で平和な理想社会が建設されるときがまもなく到来するというメシア的な希望は、すべての民衆における普遍的な感情だと思います。ただ、他の文化と比較するとき、注目される点があります。幕末維新期の神道的な世直し運動は丸山教だけではなく天理教や、大本もそうですが、彼らの願う新しい世界は、現実においては革命的方法を取りません。もちろん日本でも武力を用いる行為があったこともあります。例えば少しさかのぼると、世直し一揆という現状も取り上げられますし、皆様ご存知のようにオウム事件もありました。しかしこの3つの世直し宗教の文献の立場から見ると、理想社会を地上に建設するために、革命を起こさなければならないという思想よりは、むしろ限定された社会変革への関心があるのではないのでしょうか。この種の運動は救世主信仰運動の過程で予告されている破壊に歯止めをかけます。六郎兵衛の祈祷、隠棲、厳しい修行などはこの目的で行われたかもしれません。

もちろんご存知のように丸山教の歴史の中には、1884年と87年の間、「み組事件」と呼ばれた社会的な事件があり、革命的な形に近い出来事がありました。それは当時の松方財政によるデフレ進行の関係と理解されていますが、それは伊藤六郎兵衛の世直し思想から考えますと、丸山教、丸山神道の動きが教祖と違う流れから生じたと見られます。この末の世と期待される理想世界は、ある程度民衆神道説の立場からの世直しの特徴ではないのでしょうか。こういう伝統社会におけるメシアニズムは、もしかしたら現代社会におけるユートピアの一部分の機能を果たすのではないかと思います。宗教人類学の領域でもう一度、この日本の世直し思想や終末観と、他の文化における千年王国思想を比較研究すれば、彼らの社会背景や、宗教文化が違っても学術的な融合性のある新しい観念が作り出せるか興味深い問題だと思います。フランスの社会学者であるセギ (Segui) 先生がユートピアの理念型を描こうとした論文の中に「書かれたユートピア」と「実践されたユートピア」を区別して宗教的な現実性について論じました。この考え方ももしかしたら参考になるかもしれません。

初めて日本に来たとき、私は京都府にある大本の本部を訪ね、一その時は代表的な新宗

教だと思わなかったですが一新宗教の世界の研究に足を伸ばしました。そのとき、勉強すれば勉強するほど、開祖と呼ばれる出口なおと聖師と呼ばれる出口王仁三郎の教典に、意味が分かりにくい用語がたくさん出てきて苦労したおぼえが今でもあります。分かりやすい用語としては「立て替え」、「立て直し」とか「みろく」とか一五六七と書いて弥勒菩薩を呼んでいて一、三千世界とかすべての宇宙を示す言葉がありました。あと、わかりにくい用語といいますと、やはり神の名前など複数の用語で表現されるものです。たとえば、一例を挙げると、水晶球とか、もう 1 つは水のうかみたま、その神は大本教の神話では、スサノオとして働く神です。

メシア的な運動の主な特徴の 1 つは、豊富なディスクールを生産するという点があります。それを解釈するためには 2 つの留意点に注目しなければなりません。1 つは教祖そして信者の教祖崇拜などについて、もう 1 つは伝統表現、隠喩、言葉などです。マクロなレベルでは、宗教社会学のアプローチを使って教祖と信者の間でのディスクールの役割が理解できます。比較研究の面ではこういうアプローチが面白い成果をもたらしました。しかし、ミクロなレベルで、言葉の問題の関係で、外国で考えると、日本の宗教史の伝統背景、民俗神道のシンクレティズム、教祖の宗教的なライフヒストリー、運動の用語の特徴などをあわせて全体的に考えるときは、とても難しいものがあります。広い分野である新しい宗教運動研究のフィールドでは、予期した研究の成果が上がないときがあります。新宗教は教祖の予言物語、神の言葉—丸山教の場合は神言といいますけれども—、そして彼らが作るテキストによってカリスマ的教祖として認められるというプロセスの中で、その宗教的な運動を起こし、定着させます。その宗教的な共同体は、宗教的な体験を用いて世俗世界を動かすための集団と見られます。教団用語は、色々な分野にわたって色々な種類があります。また、この教団の用語はいろんな機能を持つと思われます。最初注目したいのは、日本の新宗教の教祖の中には、とても巧みな文章を書く文才がたくさん見つけられることです。例えば大本の出口王仁三郎とか、生長の家の谷口雅春などが挙げられます。彼らの持つ文才と心理学に関する関心を組み合わせて考えると、それは信者を引き入れる糸口だったかもしれません。けれども、外国人にとって、この民衆宗教の意味世界を理解をさせ、その世界の背景を知らない人たちに解りやすい言葉で、その国の言葉で紹介しようとするのは、なかなか簡単な仕事ではないと思います。

丸山教の場合は教祖自身が育てられた宗教的、信仰的環境や山での修行法を示す言葉にその影響が見えます。例えば、みはしらの神の修行とか、三尊の阿弥陀というふうに表現される修行などを説明するために、富士信仰に修験道として強い仏教の影響があったということを見無視すると、こういう修行の独自の名づけ方は解らないと思います。それでは丸山教の根本教典である『丸山教祖真蹟御法お調べ』—普通は「お調べ」といいますが—のなかで、いくつか翻訳しにくいところに注意して、どのように理解できるかについての話を続けて行きたいと思います。

この文献には山ほどあふれるわかりにくい特殊な用語があるので、少し整理したうえで具体的にいくつかの例を見て見ましょう。まず世直し表現、世直し思想に関する表現につ

いてです。丸山教のシンボルになった、天明海天は四文字で作られたバランスがよいスローガンに感じます。ですが、一体どういう意味を持つかということになります。お調べのテキストを拝見しますと明治 18 年からこの表現はいたるところに説明されていますが、印象からしてもさまざまです。

六郎兵衛の個人的信仰体験から見ると、神のお告げにより、富士山で太陽を象徴する日の丸を拝むようになる前、天明海天という言葉が編みだされたという話があります。この 4 文字の表現は、精神的に丸山教の神と、その神の分身である人間の和合を意味して作られた用語です。この宗教思想も特定文化と特定宗教を乗り越えてすべての人々に心に印象を与える思想だと思います。それによって、丸山教の特殊主義の中に普遍性があるという大事なことが知られます。その言葉と世直しに関連は、文明開化という背景と一緒に考えますと、丸山教の特徴がよくわかりやすくなります。人倒す文明に対して、元の父や母である天明の神に民衆が救われる、という宗教思想が繰り返して六郎兵衛に表現されます。

あとは、農業生産とか、農耕との関係の言葉も出てきます。丸山教の望む理想社会はやはり、農作物の豊富な社会であると思います。したがって、農耕を意味する言葉と表現がたくさん使われています。一番代表的なのは愈 牽 あ身田宇 ㊦ という用語です。それは富士講の唱えた言葉であった「南無阿弥陀仏」の漢字を書き換えて、日常生活に対応した言葉に作り変えたものでした。そしてただそれだけでなく、漢字一つ一つに六郎兵衛は意味をつけています。「なむ」の「な」は人、体を現す文字で、「む」は心の意味で捉えている。そして「なむ」という言葉は、彼のいう丸山の根源をつかさどるところの文字なりの意味になります。農民にとってはこの親神というのは、コスモスにある一種の生命力をもつ神で、その神を通じて、生命力が、1つの部分がもらえるという説明も感じられます。

また「お調べ」によくあらわれる神の名前は、クニトコタチノミコトという神です。クニタチノミコトの場合は、そのクニタチの立つという漢字は「た」と「ち」を分けて2つの漢字で書いてあります。農民にとって天皇制の教化思想、新しい日常の道徳によって彼らの生活と期待されるものがよくならなければ、六郎兵衛はこの思想に同化することに抵抗があったわけですね。この丸山教の動きは、一性格といった方がいいのかもしれませんが、一この時期の経済的、政治的に混乱した日本の社会の中で、宗教的な視点から仏教と神道のいわゆる既成宗教に対して、民主主義、民衆宗教の地位をあらわすものとして大きな意味があると思います。

最後にこのフランスにおける現代神道研究への期待について触れます。まだ神道研究が少ないフランスの宗教研究において、現代神道のテキストの翻訳の必要性について一言だけ述べてみます。ご存知と思いますが、フランスにおける東洋研究の伝統は、まずインド研究、それから中国研究が強く、19世紀から研究者に注目されて経典が次々に翻訳され始めました。この流れの中で、長い間日本の宗教に関する興味はだいたいその伝統に限られていました。宗教と古典と美術をセットにして日本仏教、鎌倉仏教の仏典がある程度フランスで紹介されてきました。ただ、最近のフランスにおける日本研究のうちで、これからますます展開する可能性の高い分野といえますと、おそらく人間学の部門です。

その学問には歴史学、国、民衆史、社会史、民族学、宗教学などがあります。それらの進展から日本宗教を捉え、現代神道の宗教の詳しい研究ができれば、いろんな面で非常に役立つと思います。どうしてかと言いますとフランスの学生だけではなく、フランスの研究者も、日本宗教に対する興味は持っていますが、現代の日本における宗教定義の話になりますと、特にフランスであまり知られていない教団の場合は、それが民衆宗教、民族宗教、習合宗教、新宗教、新新宗教の名で呼ばれていて、定義も限りなくあり、みんな何がなんだかわからなくなります。そのとき私のような一介の研究者は、媒介者としても非常に困ります。民間信仰と既成宗教の、中間あたりにいる現代神道の宗教を紹介しながら、観念の立場から見直す必要があると思います。その研究には非常に力を入れている、昔からお世話になっている、東洋大学の西山先生、東京大学の島菌先生、それから今回お招きくださいました國學院大學の井上先生が、現代宗教の定義や分野の大プロデューサーですので、私の仕事は、いいか悪いかわかりませんが、またこれから増えると感じます。

最後に神道研究と神道翻訳の必要性についての具体的な例をひとつ取り上げたいと思います。パリの長い歴史のある教育機関である国立高等研究大学院の第五部には、その部は主に宗教史、人類学、宗教人類学、社会人類学などを教えるところなんですが、今は神道関係の講義は一切ありません。このさびしい、あまりよろこばしくない状態を紹介したところで、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

質疑応答

【司会】ベルトンさんが主として扱われました丸山教の教典をお読みになったという方はほとんどいらっしゃらないと思います。新宗教の研究者も実はちゃんと読まない人が多い。というか読めないんですね、なかなか意味がわからない。そういうものを翻訳しようと考えていらっしゃるだけで私は尊敬します。でもこれらも視野に入れないと近代の神道はわからないということになります。日本人だと解ったような気になって、「まあこういう教典もある」でほっておくというのが実情なんです。しかし、外国ですとそれはほっておけません。何とか説明しなくちゃいけない。そうすると今日余り時間がないので具体例を省かれたですが、さまざまな難しい問題があるんですね。そのことをおっしゃった訳です。

一人、二人ぐらいはご質問を受けられると思いますので、先ほど同様確認したいことという点に絞って質問を受けたいと思っています。

【レヴィ・ミクロークリン】國學院大學調査員の Levi と申します。丸山教のひとつの翻訳についてちょっと確認したいんですけど。地の神一心行者という神様について、1つの英語の論文の中で the earth god's single-minded ascetic というふうに訳されています。その定義では、結局民衆宗教または、新宗教の観点から見た感じがありますけど、フランス語で翻訳すると、とりあえずどの立場から見て、そしてどういう訳になりますか？

【ベルトン】とてもいい質問だと思います。私は丸山教の専門じゃないけれども、たまたま「お調べ」という本をもってたからちょっと読んだくらいで……。その立場だともしかしたらフランスの場合は解釈学の立場から見たら、もしかしたら、新宗教といえます。けれども、ただ、社会史とか歴史家だと、民衆宗教になります。

【司会】多分質問は一心行者という部分だと思います。六郎兵衛をフランス語だったらどういうふうに表現するか。行者ですし、さらに教祖ですよ、それをどういうコンテキストで訳そうと思っているかということです。

【ベルトン】フランスの民俗学者の中だと、行者というのはフランス語で ascète です。厳しい修行をやる人だから。その言葉にはキリスト教の影響も強いかもしれませんが。私の友人のアンネ・ブシー (Anne Bouchy) さんが、山伏や修験道の関係の行者の研究をしています。彼女も ascète という言葉を使います。あと生き神行者という表現も出てきます。これはまた難しくなりますが、ascète vivant とか翻訳できます。しかし、なかなかその分野の関係ない人は ascète vivant とはピンとこないと思います。

【司会】先ほどのでは生き神というのを、ちょっと形を変えて訳したほうがいいというのですが、フランス語で生き神というのはどういうふうに訳されているのですか？

【ベルトン】divinité vivante と訳しました。生きている神様と文字どおりです。

【司会】それでは時間参りましたので、ベルトンさんの御発題はこれで終わりにさせていただきます、どうもありがとうございました。